

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月11日現在

機関番号：32710

研究種目：研究活動サポート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820074

研究課題名（和文） 密教経典の変容から窺える東アジア仏教文化形成の一様相
—穢積金剛類経典を中心として研究課題名（英文） Exploring the process of the formation of East Asian Buddhist Culture:
With special reference to two Tantric scriptures and their transformation

研究代表者

池 麗梅 (CHI LIMEI)

鶴見大学仏教文化研究所・准教授

研究者番号：50449360

研究成果の概要（和文）：

本研究は、二つの密教典籍の日本古写経本を、刊本や敦煌写本との比較研究を基本的な方法とすることによって、漢訳仏典を研究するに際して、刊本を過信する危険性を改めて示唆できたと共に、日本古写経本の出現と活用によって漢訳経典を校訂し、そのテキスト内容の歴史の変遷を更に正確に把握した上で、経典が受容される過程で被る変容について柔軟に理解される可能性をより広げること努めたものである。

研究成果の概要（英文）：

This project, by comparing the texts of two Tantric scriptures both in medieval Japanese manuscript collections of Buddhist scripture with those found in Dunhuang manuscripts and the texts in woodblock printing collections, demonstrates the dangers of relying too much on printed editions of texts. This suggests both the importance of a relatively strict revision of Chinese translations of Buddhist scriptures based on the discovery and application of medieval Japanese scripture manuscripts, as well as the possibility of grasping more correctly the historical process of change of textual content, via the work of revision. It also attempts to help promote the potential for a relatively flexible understanding of the reception and transformation of Buddhist scriptures in East Asia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学

キーワード：仏教学・東アジア仏教・仏教文化・密教・疑偽経典・中国道教

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

穢積金剛とは、烏枢沙摩明王ともいい、絶大な慈悲の力を駆使し、熾烈な焚火で汚穢と

邪悪を焼き払う力を持つ密教の尊者である。穢積金剛の徳行を広める経典として、『靈要門』および『禁百変』がある。『貞元新定釈教目録』(800年)によると、『靈要門』と『禁百変』は、『大威力烏枢瑟摩明王経』と共に、

北天竺国出身の三蔵沙門阿質達霰が安西で訳出し、唐玄宗開元二十年(732)の勅命により入蔵を果たし、それ以来、諸経録に記載され種々の大蔵経の所収するところとなった。この二つの密教経典は九世紀の入唐僧の空海、円仁、円珍によって日本にも将来され、現在日本に伝わる古写経本の源流となった。

『靈要門』と『禁百変』との関係は、その内容的継続性からも明らかなように、同一の文脈を構成するものであり、また古写経本の形態から判断すれば、実際は同一経典の二つの部分であると思われる。しかし、これまで研究者の間では『靈要門』よりも『禁百変』が注目されたことに一つ意外な理由があった。それは、刊本大蔵経本『禁百変』には、経典本文の呪法に引き続き、四種類の刻印と四十二種の符、すなわち道教的要素が含まれたため、『禁百変』を偽経視すべきかどうかをめぐる、江戸時代の学僧の間で激しい論争が呼び起こされた。現在の仏教研究者の間では、『禁百変』が道教的要素を多分に含む密教経典と理解する傾向が圧倒的に強い。例えば、三崎良周「中国・日本の密教における道教的要素」(『密教と神祇思想』、東京：創文社)が道教に近接した事例として挙げる密教側の経典の一つが『禁百変』であった。更に、長部和雄「竜樹五明論小考」(『唐宋密教史論考』、東京：永田文昌堂)は、符印を示す経典として『禁百変』を採りあげ、これが入蔵された経典であると疑経視するまでには至らなかったものの、同経の内容は、「著しく道教臭味を帯びた現世利益、不老長生を強調した所謂雑密経軌」として、『竜樹五明論』と同趣向にして雑駁であると指摘した。そして、『禁百変』の中国的性格を最も痛烈に批判しているのは、神林隆浄氏による『仏書解説大辞典』(巻一)の解説なのである。そこには、「本経が支那の道家の作であることは一見して、直に何人も首肯し得る。延命と利得とは支那人本来の思想であるから、此の思想に應ずる様に作られたのが、即ち此経である。この中の真言の如きも梵漢交雑した、実に不純極まるものである」とあり、いわば酷評である。また、ハーバード大学の James Robson 氏もまた “Signs of Power: Talismanic writing in Chinese Buddhism” の中で呪符を扱う仏典として『禁百変』を取り上げている。

(2) 本研究の着想に至った経緯

前項で述べたように、『禁百変』が、『靈要門』と様々な共通点を分かち合いながらも、後者よりはるかに注目されてきたのは、それにまつわる偽経疑惑や道教的要素の混入が原因であったと理解されよう。ところが、不思議なことに、様々な議論を呼び起こした経典本文の問題箇所、つまり「印法第二」と「神変延命法」という二つの部分において、『大正蔵』の底本である高麗蔵本の内容と、校本

である宋版や明版などの内容とは大幅に相違しているという事実については、申請者が承知している限り、誰も触れていないようである。つまり、これまでの議論は密教と道教との交渉という思想史的問題に注目する余り、同経典のテキストそのものに対する注意は不十分になっていたのではなからうか。特に、『靈要門』や『禁百変』など成立背景が非常に複雑な経典は、まずテキストそのものの問題を解明した後でなければ、その経典の内容と正面から向き合うことは不可能であると言ってもよからう。この不可能を克服し、これからの経典が内包する問題や意義をはじめて正當に理解する契機を与えてくれたのが、日本古写経本の出現なのである。

筆者は、国際仏教学大学院大学の学術フロンティアプロジェクト(「奈良平安古写経研究拠点の形成」)に研究員(PD)として勤務した頃(2005-2007年)から、大阪金剛寺、名古屋七寺、京都興聖寺等に所蔵される平安・鎌倉時代の古写経を多数実見し、穢積金剛関連経典のテキストに関する論文をそれぞれ日本、台湾、シンガポールの学会で公表してきた。その際に、密教経典研究分野における日本古写経の持つ重要性を国際学会にアピールした上で、これらの新出文献を、東アジア仏教そのものの性質とその形成に関する従来の研究課題といかに関連付け位置付け、利用すべきなのかについて研究者と議論した。そうした研究経験や意見交換を重ねる中で、穢積金剛関連経典をはじめとする古写経本と刊本テキストの相異を明らかにするなどの基本的な文献批判の必要性を痛感し、本研究を着想するに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究は、従来二つの仏典として扱われてきた『靈要門』及び『禁百変』の日本古写経本、従来の刊本テキスト、更に敦煌写本との比較研究を基本的な方法とすることによって、漢訳仏典を研究するに際して、刊本テキストを過信する危険性を改めて示唆できたと共に、日本古写経本の出現と活用によって漢訳経典を校訂し、そのテキスト内容の歴史の変遷を更に正確に把握した上で、経典が受容される過程で被る変容について柔軟に理解される可能性をより広げることにもつながったと思われる。

このような研究方法の妥当性に新たな裏付けを提供し、補強するために、今回は穢積金剛類仏典に着目したが、最終的には、テキスト批判によって浮かび上がってくる疑偽経典の形成と漢訳仏典の変容過程の総体を明確にすることが目的であった。本研究やこれに類する探究を積み重ねることで仏典の東アジアにおける変容とその背景にある思想文化の基盤、民衆救済の需要、地域文化へ

の浸透に伴って生じた葛藤と妥協の諸様相についての理解は確実に深まったと考えられる。

3. 研究の方法

本研究は、『靈要門』と『禁百変』の日本古写経本、刊本テキスト、敦煌写本との比較研究を基本的な方法とするものであった。研究期間中は、日本古写経本数種とフランス国立図書館所蔵敦煌本に関しては原本（或いは写真等）による調査を行い、調書の作成や、所蔵機関の許可に基づく撮影を独自に実施し、それら古写本と刊行流布本のテキスト内容を比較検討することにより、『靈要門』と『禁百変』が現行本の形に定着するまでのプロセスをいくつかの段階に分け、それぞれの年代を概ね特定し、それぞれの段階で生じた変容の背景、要因を分析することを試みた。このような調査研究方法によって、仏典が東アジア世界固有の思想文化という基盤の上で、各地域への浸透に伴っていかに民衆救済の需要に応じ、葛藤と妥協を経験しながら変容を遂げてきたのかについて分析し、東アジア仏教文化形成の様相に関する確実な新知見を加えようとする最初の目的は達成できたと考える。

4. 研究成果

東アジア仏教にとっては、その思想文化の源流であり重要な拠りどころでもある漢訳仏典が有する重要性は今更論ずるまでもないが、漢訳仏典とはインド文化圏に生まれ育った仏典が新しく生まれ変わったものであるとも言われ、仏教の経典が東アジアで受容される中で遂げていく変容やそれと共に新たに生み出された仏教文化思想の諸様相の解明が課題とされてきた。仏教聖典とはいえ、必要に応じて新たな要素や内容をその中に加えたり、逆に望ましくない部分をそこから欠落させたりするような動機といわば勇気を、東アジアの仏教者が持っていたことは確かである。東アジアにおいて、仏典に舞台を借りて、仏教教理と中国や日本的要素を盛り合わせた新たな経典——疑経（或いは偽経）類が大量に形成されてきたことは、何よりもそれを雄弁に物語っている。漢訳仏典の研究を進めるために、テキストクリティックは避けては通れない基礎作業となる。通常、一つの漢訳仏典は複数の経典集成（大蔵経、仏教叢書など）に収められていることが多い。現在、仏教研究者の間で最も広く使用されているのが大正新脩大蔵経をはじめとする刊本大蔵経のテキストである。これらの経典集成は権威的とは言え、成立年代は早くても十世紀以前には遡れないため、その中に収録されているテキストはすでに変容を遂げた後のものである可能性が払拭できず、テキストク

リティックの資料としてはいくつもの制約があり、無条件に信用すべきものではない。

そこで本研究は、『靈要門』と『禁百変』の日本古写経本、刊本テキスト、敦煌写本との比較研究を基本的な方法としてみた。研究期間中は、まず平成22年度では、国内外における原本調査の準備を進め、携帯用ノート型パソコンやデジタルカメラ等の設備備品、消耗品等を購入するなど研究環境を整えた。次に、寺院・文庫・図書館の目録、博物館の図録等を網羅的に調べ、現存古写本の所在を確認し、聖教本を含む『靈要門』と『禁百変』の現存古写本のリストを作成し、調査計画に基づき原本調査を徐々に展開してきた。また、国際仏教学大学院大学・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」が提供する「日本古写経データベース」を利用したほか、当プロジェクトの先生方のご協力により、日本と韓国の寺院調査、または中国国家図書館と北京大学図書館の敦煌写本の調査は効率的に進めることができた。さらに、写本の画像を入手次第、翻刻、校訂を行い、調査研究で得られた成果は、『鶴見大学仏教文化研究所紀要』（第16号、2011年3月）に掲載したほか、海外の学会にもエントリーした。

平成23年度では世界各地で新たに公開された本研究に関連する新出資料に注意を払いながら現存古写本のリストを更に見直し、国内寺院に所蔵されている聖教本、または前年度に中国国家図書館所蔵の密教関係の敦煌本の原本調査のデータを取りまとめ、諸テキストを翻刻し校訂作業を進めてきた。計画通りに現存諸本の原本調査を終えることができ、校訂本の作成が完成し、ようやく『靈要門』と『禁百変』の本格的な文献学的研究に進んできている。また、これまでの調査研究で得られた関連成果の一部は、『鶴見大学仏教文化研究所紀要』（第17号、2012年3月）および2011年6月20日から25日台湾Dharma Drum Buddhist Collegeで開催された大規模な国際仏教学学会（The XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies）で報告したが、その後の研究で判明したことも引き続き国内と海外の学会や学術誌で公表していくつもりである。

このように、研究期間中は古写本数種の調査を行い、調書を作成した上、それら古写本と刊行流布本のテキスト内容を比較検討することにより、『靈要門』と『禁百変』が現行本の形に定着するまでのプロセスをいくつかの段階に分け、それぞれの年代を概ね特定し、それぞれの段階で生じた変容の背景や要因の分析も試みた。こうして地道な調査と基礎的な文献研究によって、漢訳仏典を研究するに際して、刊本テキストを過信する危険

性を改めて示唆できたと共に、日本古写経本の出現と活用によって漢訳経典を校訂し、そのテキスト内容の歴史的変遷を更に正確に把握した上で、経典が受容される過程で被る変容について柔軟に理解される可能性を立証できたと思う。

更には、研究期間中は穢積金剛類仏典に着目して本研究で採用された方法論の妥当性に新たな裏付けを提供し補強しようとしてきたが、この研究方法は二つの密教経典だけに止まることは決してない。本研究で目指しているのは、むしろテキスト批判によって浮かび上がってくる疑偽経典の形成と漢訳仏典の変容過程の総体を明かにすることであり、仏典が東アジア世界固有の思想文化という基盤の上で、各地域への浸透に伴っていかに民衆救済の需要に応じ、葛藤と妥協を経験しながら変容を遂げてきたのかについて分析し、東アジア仏教文化形成の様相に関する確実な新知見を加えようとするのが本研究の最終的目標なのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①池麗梅、『穢積金剛説神通大満陀羅尼法術靈要門』の受容と変容——日本古写経本の発見とその意義、鶴見大学仏教文化研究所紀要、査読無、16号、2011、215-241。
- ②池麗梅、伝最澄編『天台靈応図本伝集』の研究(一)——現存最古の李善単注本「遊天台山賦」、査読無、17号、2012、177-205。

[学会発表] (計1件)

- ①CHI LIMEI, "Reception and Transformation of the Huiji Jin'gang shuo shentong da-man tuoluoni fashu lingyaomen", Presentation at The XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, on June 23, 2011.

[図書] (計1件)

- ①池麗梅、(穢積金剛説神通大満陀羅尼法術靈要門)之文本的流傳與變化、『佛教文献與文學』(佛光文選叢書)、台湾:佛光文化事業有限公司、2011、92-119。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池 麗梅 (CHI LIMEI)

研究者番号:

50449360

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし